

編集後記

▼特集は、中学一年生を発達段階におけるひとつの重要な通過点として、その実像に迫ろうと試みました。九五%余の高校進学率の今日では、中学校生活は高校入試を当然の前提として成り立っています。依然として「定期テスト」の成績による序列が基本で、その点数で選別されてしまいます。九〇年代に入つて文部省が導入した「新学力観」すなわち生徒の「関心・意欲」を重視して基礎学力を軽視する学力観は、新潟県では必ずしも定着せず、相変わらず受験学力の養成になっているようです。

▼中学一年生は、希望に燃えて入学し、けなげに努力します。「中学一年生になって成長したと思うこと」は、そのことをかれら自身の評価で示しています。自分をマイナスに評価しているのはわずかです。これが学年が進むにつれて増えるとみられます。石原さんの「近ごろの中学生」は、それを例証しているといえましょう。

▼現場教員、五十嵐(国語)、鷲頭(数学)、六戸(英語)の諸氏からは中学一年生の学習内容や方法を提起していただきました。

▼児玉義明さんの講話をきいて、命の尊さに素直に感動する発言には、中学生の本来の姿が見られます。「児玉さんにとって命は自分のものじゃなく、ほかのいろいろな人のものだとわかった」とか「日ごろ『死ぬ』や『殺す』などの言葉をなんのためらいもなく口にしてきた」という反省など印象的です。

▼小林正弘さんの「私の日の丸・君が代の授業」は、多くの貴重な示唆に富んでいます。とりわけ生徒たちの授業後の感想が内容豊かで、生き生きしています。日の丸・君が代が法制化された下でいっそうこのように授業実践が求められることでしょう。

▼福本安正さんは、新潟大学の日の丸常時掲掲の問題は大学創立の頃、文部省に抜け駆けの巧名を得るために他の大学に先駆けて、レッド・パージを始めたのと似ていると、指摘します。その経験を生かして反対運動がづくことを切望しています。

▼宮樫繁春さんの「中条町湧水の生物と保護運動」は胎内川水系湧水の生物の研究とその保護についての労作です。前任の中学校で生徒とともにコツブムシの研究に数年も取り組み、その成果は科学研究コンクール「学生科学賞」で総理大臣賞に輝きました。

▼江平稔さんは、上越市の教育支援員制度の新設が学校現場で歓迎されていることや問題点を報告してくださいました。他の自治体に広がることを願っています。

▼田口幸さんの論考は、養護教諭がいま学校でどのような役割をはたしているか明らかにして、異教委幹部が養護教諭の研修会でセクハラ発言をしたことに対する実質的な抗議になっっています。

▼資料室は、解説を読んでもただだけでは充足するように努めました。(吉田)

にいがたの教育情報 NO. 61

2000年3月20日発行

編集・発行 にいがた県民教育研究所

発行人 長崎 明
7951-8116 新潟市東中通1-86 山崎ビル
電話・FAX (025) 228-2924
振替口座・00640-0-12332
印刷所・中央印刷さびす

本誌内容の無断転載を禁じます。